し。凡て佛名佛土を解するに、近くは淨影觀經疏本左四丁に、佛の別號を立つるに、例を示して云く、別中立名乃有多種、或隨種姓、如加葉佛釋迦佛等、或就色身、如身佛、身上佛等、或就音聲、如妙音佛、如聲佛等、或就光明、如妙光佛、普明佛等、或就內德、如功德佛、智慧佛等、或就譬喩、喩別種々、或從壽命、今此所觀從壽爲名と、彌陀を無量壽如來と云ふは壽命に從ふ名となせり。又探玄記三六十五丁右に、汎論佛及刹國土の事立名不同略由五相、一或因機感、二或由佛本願、三或依本行、四或先佛記別、五或表示法門と、此五例が出してある。諸佛菩薩は德を名に施すと云ふて、各一能々々に就て立名し、其中に或は衆生の機感に應じて、名を顯し、或は因位の本願に約し、或は先佛より受くる記別に依りて名を立て、或は光壽二無量の德用法門で、彌陀と云ふ名を得る如き種々の例あり。今阿閦鞞佛を不動如來と云ふのは、法身不動の不生不滅遷變のなき邊で、此名ありとすれば、第五の表示法門の例に當る。又嘉祥勝鬘經寶窟上末十九丁左に同じく五例が出てゝある。探玄と稍別なり、今之を出さば、諸佛立號義有多門、或從姓立名、如迦葉釋迦、或從光立名如錠光等、或從聲立名如微妙聲佛、或從喩立名如滿月光、或從因立名燃燈佛等云云と、又已下の佛名一々解釋せず、此等の例に當てゝ準知すべし。又此經には六方段に總して三十八佛を出し、唐譯の方は十方で四十一佛が擧げてある。これ方位に開合あるゆへ、佛にも自ら開合ありと知るべし。○各於其國等、二明證誠相、此下堯慧の私集鈔下十二丁に、各於其國者……文點兩樣也、一義云其國にしてと訓すべし。此時は諸佛が各其本國にして、舌を出して即其世界を覆ふなり。又一義は其國よりと訓ず、其時は諸佛各其自國より、此釋迦佛の說法の會座に舌相を出して、娑婆三千界を覆ふて證誠し給ふと云ふ義なり。此は非なり、前義を可とす。故に覺師の御展書にも、各其國にしてと於の字を讀んであり。廣長舌相とは不虛妄の相にして三十二相の端一なり。悲華經一二十八丁に、我昔於無量阿僧祇億那由他劫修菩薩道時身常遠離妄語兩舌惡口綺語是故我今得是舌相とある。されば廣長舌相は佛の常に備へ給へる相好にして、之を出すは即不妄語を表示するもの、已に因位に不虛妄語の因に依りて得る廣長舌相なるゆへ、是を出して衆生に見せるのが、則ち眞實不虛妄と云ふ事を表す事になる、故に今諸佛各々其國に於て、釋迦所說の法を證誠する爲に出し給へり。三千大千世界は、一佛の化境にして、即諸佛が衆生を敎化する其範圍を三千大千世界と云ふ。此は須彌四洲を初として、六欲梵天等の三界を總括して、一世界として、それを一千集めたるを小千世界と名け、其小千世界を又一千合したるを

中千世界と云ふ。其中千世界を又千合したるを三千大千世界と云ふ、俱舎論第十一卷五
智論第七卷等に出づ。近くは四教儀集註上六十六を可披見、諸佛が舌を以て大千世界を覆
ふと云ふは通途のことに非ず。智論八五に佛婆羅門に對して、廣長舌相を出して面上を
覆ひて髮際に至ると云ふことがありて、丁度舌が髮の邊まで覆ふなり、これは小信の爲
なり。然るに大品經一三に釋迦摩訶般若波羅密法門を說かんとして、之を信受せしめん爲
に廣長の舌相を出して徧覆三千大千世界とある。是は小事を證誠する爲めに非ず、一大
事因緣たる般若波羅密の法門を證誠する爲であると、智論に釋せり。今こゝも利益安樂
大事因緣たる念佛往生の法門を說て、それを衆生に信受せしめん爲に、大舌相を出して三
千世界を徧覆するは實に重大の證誠にして、全く名號不思議の極難信の法なるが故なり。
○說誠實言とは誠諦眞實にして虛僞虛妄ならず、確實なる言の意なり。諸佛の證誠とは
即是れなり。然るに誠諦の言に就ては、探玄記六十五に由始終實言無二故名第一誠諦之語
とありて、其下に始終は因と果のことにして、自利に約し利他に約し因果に約して三義
を以て委く釋す披き可見。○汝等衆生當信等、三擧證誠言、汝等衆生とは、六方諸佛が自
國の衆生に告げて信敬せしむる語なり。而し通讃下六に二義を出し、初義は今云ふた通

りの說、第二義は釋迦轉引彼佛意言證彼西方令一會衆生信敬也とありて、即諸佛が
自國の衆生に對して、誠實の言を說き給ふのを、釋迦がそれを引き來り轉じて、已に諸
佛が此の如き故に、應に此法を信ぜよと娑婆の衆生に勸むる言が汝等衆生等と云ふ文
なりと解す。此は非なり、何故なれば元と釋尊が此經を說き給ふ時、十方諸佛も同時に
自國に於て彌陀經を說きて同勸同證す。例せば華嚴經の一品一會の終りに、結通の文と
云ふて、娑婆界の菩提樹下の華嚴の說法起ると同時に、十方世界に華嚴の說法が起り
て、一所即一切所の說法となりてあり。今もそれに似て釋尊祇園精舍で、此經を說くと
同時に、六方諸佛の國に各々說法が起り、同樣に諸佛が其國々々の衆生に彌陀の念佛往
生を勸讃して信受せしめ給へり。故に善導散善義七に、十方諸佛悉皆同讃同勸、同證、
何以故、同體大悲故、一佛所化即是一切佛化、（中略）又十方佛等、恐畏衆生不信釋迦一佛
所說、即共同心同時各出舌相、遍覆三千世界說誠實言、汝等衆生皆應信是釋迦所說所讃
所證、とあり。此指南に依れば諸佛が自國の衆生に勸めて、釋迦所說の彌陀經を信ぜよ
と勸め給ふ文なり。此を吾祖化卷に良勸既恒沙勸信亦恒沙信故言甚難也と釋せり。次に
稱讃不可思議功德とは、上の段の讃歎阿彌陀佛不可思議功德と同じことで、彌陀の依正

二報の功德を一名號に收めて云ふ。即執持名號の因に依て如何なる惡凡夫も、速に報土に往生することを得るは、唯佛與佛の境界にして、因人の測知する所に非ず。彌陀の不可思議功德と云ふより外なし。先に釋迦も不可思議と讃じ、今諸佛も不可思議功德と稱讃す。これが善導の同勸同證との給ふ所と思ふべし。○一切諸佛所護念經とは、此經所說の名號を執持し、一心不亂の信心の行者となれば、一切諸佛の爲に護念せらるゝことを說いた經故に、所護念經と名く。善導往生禮讃偈の終に云何名護念若有衆生稱念阿彌陀佛若七日及……一聲一念等必得往生證誠此事故名護念經とあり。されば證誠と護念と分けて見れば、分らるゝなれども、亦證誠即護念ともなる其義可知。時に此所に於て一の論ずべきは、堯惠私集鈔下十一丁に、問云證誠諸佛者悉來集此土乎且如金光明經四方四佛此會來至與欲證誠如法華經多寶佛塔從地涌出眞實也證誠今經不然此土不來乎、と問を出して、其答に但し不來者爲舌相神變也と云ふて、一向に其要領を得ず。是に於て先輩易行院は、今二義を以て辯ずとして同師發揮の說を考へられたから、それを今潤色して申すと、一に此經の諸佛證誠は、元と第十七願の誓約に酬報して、各々自國の衆生の爲に、彌陀の名號を稱讃し給ふが、諸佛の當り前の役目なり。依て釋迦の說法を證誠するは諸佛の傍の役目なり。故に先づ自國に於て、彌陀の名號を稱讃して、娑婆の釋迦佛彌陀經說法の會座には來至なきなりと云へり。又一義は此彌陀經の證誠は一切諸佛同等の證誠にして、唯一佛二佛に限つた證誠に非ず、十方法界の諸佛が同じく證誠す。金光明經や法華寶塔品の證誠は、別緣の證誠にして、彼四方四佛が來集し、證誠せねば他に來る佛はない。又法華の會座も多寶佛が來らねば外に證誠する佛がないこれ皆別緣の證誠なる故、此界に來至せり。今此經は十方恒沙の諸佛同等に、彌陀の名號功德を稱讃證誠するの故、別に此土に來至することはない。されば十方諸佛同じく此土の釋迦所說を證誠すると云ふ時は、釋迦は主となり、諸佛は伴となり、又諸佛の本國の證誠讃歎を主とする時は、此土の釋迦の證誠は伴となる。主伴互に具して、一佛卽一切佛となる、一證誠卽一切證誠となる、華嚴の法門と齊しくなる、こゝが弘願一乘の甚廣なる所である。尙此外に諸佛の能證誠の佛土は淨土か穢土か、又佛は報身佛か應身佛かの論あれども、一言に云へば土は淨穢に通じ、大經の法藏の選擇する二百一十億の土と云ふと同じと云ふ說もあれど、今は釋尊が娑婆の穢土應身佛としての說法であるから、此れと同時に、同勸同證する佛も所依の土は穢土に約し佛は應身に約して、諸佛證誠の相を御說き

なされたものと存ずと先輩は辯ぜられたり。今も之に依るべし、但し敢て淨土に通じ報身に通ずるを遮せず、具に堯惠鈔下十三已下參照せよ。○舍利弗南方世界等、二擧南方三、初指方擧佛、○各於其國等、二明證誠相、○汝等衆生、三擧證誠言、已下の五方の科段前と同じければ、佛名國土は違ふけれども、義に異りなければ一々辯ぜず。たゞ西方世界の無量壽佛と云ふは、阿彌陀佛の漢譯なれば同佛のやうに見ゆ、若同佛とすれば、自身のことを自身が證誠讃歎することになりて、論理が合はんかの樣に聞へる。そこで古來から此を同佛とする說と、同名異佛とする說とがある。其中通讃は異佛とすると、同佛とするとの二義を出し、元照横川は別佛とする、智旭性澄は二義を出して決擇なし、大佑の略解は通讃の後義を取て慈恩云、設若彌陀自讃於理何妨謂稱讃此法門令生深信非自代其善也と云ふてある。具に堯惠鈔下十六に諸說を列してあり。又良忠法事讃私記下二十參照せよ。之に依て眞宗門內末學弊帚錄は同名別佛の義を取り、又聖淨決は同一佛とし、今不存梵音者爲分能所讃也とのみ云ふて、漢語の無量壽とあるかとても異佛の證據にならぬと云ふ。又吾派の慧空師は、義要下末十五に、諸師の異說を列擧して、用否可在末學情として決擇なし。理綱院は同名別體と辯ぜられた、それを受けて香月院も同

名異體とせり、易行院も之に朋ふ。今私に考ふるに西方と方所を指して無量壽佛と名が出してあれば、それを苦んで之を同名異體とするに不及、西方の彌陀も諸佛の一分なれば、濁惡の衆生をして信受せしむる爲には、能讃の佛となりて名號を讃歎するに何んの不可かあらん。諸經中に佛が衆生を導く爲に自ら能讃し給ふ例不少、今も極樂の化主たる彌陀佛とするに差支なしと思ふ。又別佛にする理由として、阿彌陀と云はずに、漢名の無量壽と云ふは別佛なる證據ぢやと主張すれども、此は理由薄弱で、先の如く能讃と所讃と地位の異ることを知らしむる爲に、故らに漢語の名を擧げたと云へば、却て同體說の强味となる、要するに見樣に依てどうでも取れるが、予は寧ろ同佛說に隨ふものなり。

東方世界南方西方北方下方上方の六方段は、初の東方の一を辯じ、後の五方は何れも科文は同樣、たゞ佛名の異あるのみなれば、一々文を牒し分科をせず、隨て講義をする必要もなき故略之、讀者此を諒せよ。

○舍利弗於汝意云何、三擧益勸信二、初釋經名正勸二、一自問、此下の科に擧益勸信と云ふは、此は上に於て釋迦諸佛の證誠に依りて彌陀の名號を聞き、願生の信心を生ず

るものは、現世に在りては諸佛に護念せられ、不退轉の益を得。當來には極樂の往生を得、大涅槃の證りを開くことを明して衆生に信心を勸むるゆへ、擧益勸信と先輩も科を立てられた次第なり。さて於汝意云何とは、上にも此と同じ言があつた、即正報段の初に彌陀の名義を釋する所なり。彼所は衆生往生の因に就て、名號の謂れを聞き開くと云ふ肝要な場所、此所は其名號を信受して淨土に往生する果に就て、吾人凡夫が現世に在りては諸佛に護念せられ、速に不退轉の益を得、未來は佛果の證りに至ると云ふ經名を顯す大切なる所故、佛が舍利弗に對して更に念を入れて於汝意云何と問起し給へり。然るに諸佛勸信中の經名は皆稱讃不可思議功德一切諸佛所護念經と十六字になりてあるに、今は一切諸佛等と八字の經名になりてあるは、稱讃等の初の八字は、已に上に顯れ終りてあるから改めて云ふ用なし、下の八字丈が不審にて、未だ說てなき故、今之を問ふたもの、之を唐譯の經には具に經名を擧げて、稱讃不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門の十八字になりてある。○舍利弗若有善男子等、二自答二、初應問釋經名二、初擧聞名者、此下經文異本ありて唐、宋、明、高麗の四本共皆、聞是經受持者及聞諸佛名者の十二字に作る。依之慈恩疏科牒文並に元照、智旭、性澄、は十二字の本に依る、慈恩の通贊の方は十一字なり、又大佑の略疏、横川略記、元祖小經釋は十一字の方なり。今家御依用本は十一字の方で善導の法事讃が十一字であるが、それと合す。他師の中天台義記、海東元曉疏も十一字本に依れり。今家の正本に就て解すれば、諸佛所說名とあるは、上の六方段に說てある彌陀の名號南無阿彌陀佛のことなり。此經全體が諸佛の第十七願に酬ひて、彌陀の名號を讃歎するより外なき故、諸佛勸信の語中に稱讃不思議功德と名號のことを說てある。それを今諸佛所說名と云ふ。及經名者とは此經の題號の阿彌陀經と名くる、それを聞くものと云ふ事、此を彌陀經釋十七に、問云此經說阿彌陀功德之外全元別事、今文何故亦讃經名、答佛與法別是故各有利益、佛者阿彌陀佛也、法者阿彌陀經名也とありて、此經所說の法は、彌陀の依正功德を說て之を衆生に聞信せしむるに在り。其爲に釋尊や十方諸佛が證誠勸信する、其一部始終を阿彌陀經として經名を立つ、經名は能詮に就き、阿彌陀佛は其所詮の物柄、之を人法に分れば阿彌陀は人なり、其れを說くは經にして法なり、人法と分るゝ邊で、且く二に分つなれども、他經と趣きが異りて能說の經と所說の人の彌陀とが全く一で、佛名卽經で實は別はない。共に不可思議功德の利益を備ふるもの故にそれを聞く者は、現生の利益を得ると下へ移る文なり。○是諸善男子皆爲一切等、二示

現益、此現益の中に開けば護念と不退の兩益あり。當益を加へて三なり、彌陀の佛名を聞くものは、諸佛の爲に護念せらる、ゆへに不退轉に住す。是れ今家の現生不退の證文となる所なり、故に眞要鈔本の終に此文を引て、一念解了の心をこる立所に、攝取の光益に預り、不退轉の身となることを顯すに、觀經の念佛衆生攝取不捨の文と、此經の今文とを引て明してあり可見。阿耨多羅三藐三菩提、此に無上正遍等と譯す。華嚴音義一十四釋す。或は無上正遍道とも云ふ、吾祖常のお語に、正定聚に住するが故に必ず滅度に至ると仰せられて上の現益で護念と不退の兩益を得る故、自ら當來滅度の證りに至るなり。即第十八願の信心の利益に依りて、第十一願の正定滅度を得る相に符合す。○是故舍利弗汝等、二結上勸信受汝等とは舍利弗を初め、一會大衆及末代の惡衆生にまで及しての語なり。我一佛の語ならば、疑ひを生ずることもあらんが、六方恒沙の諸佛までが、勸信なさるゝ故、宜しく之を信受すべしと勸め給ふ言なり。○舍利弗若人等、二舉發願益勸二、初明發願利益二、初舉發願人若有人とは、上に現當の益を擧げて諸佛の證誠を信ずべしと勸め、今更に發願の益を擧て勸む、これに因て今此文が來るなり。已發願とは過去に發願して、淨土に生ぜんとするもの、現在に彌陀淨土に生ぜんと發願するものを今發願と云ふ、當發願と云ふは、今生で時機熟せざれども、當來彌陀の淨土に生ぜんとするもの、此等過現未の三世に亘りて發願するものは、共に欲願往生の人故に、彼三人の者を結んで一句とし、欲生阿彌陀佛國者と云へり。○是諸人等皆得等、二示現益、是諸人とは上の三發願の人を指す。皆得不退轉とは略記三十四丁左に、利益を三と開て、現生不退と、當來と、菩提の果とせり。往生の益の外に、菩提の果を云ふは今家より云へば往生即成佛に非ずして、方便化土に生ずるものは不退の近果なり。それより報土に生じて成佛の果を得るが遠果なり、そは上段と說相稍別にして、護念の果を開かず往生と菩提の二果に分てあるのが、眞門方便に通じて說てある所と先輩が申された。依之是より前の六方段諸佛の證誠護念の所には、隱顯はなけれども、此下の衆生の往生の所は機相にかゝる所ゆへ、愚禿鈔上卷に依て見ると隱顯が分れて、彼文に執持に三あり已今當、發願に三あり已今當とある。上の執持名號の下に顯には自力の稱名、隱には他力信心と辨じた如く、今此發願にも眞門自力の行人が、念佛往生と聞て自力稱念を勵んで已に發願したもの、今發願するもの、當來發願するものと、已今當に亘りて發願するものは、早晩必ず往生せしめんと云ふが、二十願不果遂者の誓ひ故その

相が此經文に說き顯してある。若已生、若今生、若當生と、三往生の文が果遂の相である故に、此を横川の略記には、已願の中には已今當三生あり、今發願中有今當二生、當發願中唯有當生と云ふて一度名號を聞て、念を淨土に係けた者は、三生かゝりて報土の往生を遂ぐるものもあり、二生一生と別あれど、皆往生を遂げ、終に阿耨菩提の佛果に至ると云ふ眞門の機が、敎へざれども、自然に眞如の門に轉入する文と見るが、顯說の見樣故に、若の字を置て不定を顯すものなり。若隱の義から云へば、此發願が執持と同じく第十八願の信樂所具の欲生心で、即信心の換名なり。此信心を得たものは現生には不退、當來には往生して佛果の大益を得ると云ふことを說て、皆得不退於阿耨多羅と云ふ。次の若已生若今生等とは、過去にて信心を得たものは過去に已に往生し、今生にて信を得たものは今生に不退の益を得る故に、命終り次第淨土に往生するに間違ひないと云ふことを說き顯すが、三發願三往生の經文なり。若然らば弘願の時は若の字の不定は云何と云ふに、其時は若の字は發願する機が早いと晩いと種々不定であるから、それを若已生若今生と云ふなり。依て此下の經文は眞門と弘願の兩方に通ずる說相とするが、今家の見方なり。其外西山は發願往生を云ふ宗義故、此文が都合宜し。又鎭西は其反對に唯願のみでは往生は覺束ない故、願行具足せねばならぬと云ふので、此下の發願に上の執持名號若一日七日の念佛の行を持來て、願行具足して往生すと解す。其義法事讚私記下五十に出づ。又今家末學の中でも、弊帚錄下二十九聖淨決下等は皆他力信心の因に依て現生に不退に住し、當來往生即成佛の益を得ると、隱義の一邊で解釋せり、披き可見。問云前の經名に約する所には、護念と不退と菩提との三益あり。今は三益と云へども、現當を合すれは二益にて護念の益なきは云何。答此は略記三十四に、釋之此中自應有護念益準前可知とありて、約まり影略互顯の意なりと知るべし。○是故舍利弗等二結上、勸願生是故と上を承て先の如く發願する者は、かゝる廣大の益ある故、有信の行者は速に願生の心を發せよと上を結て勸め給ふ文なり。○舍利弗如我今者等、三舉互讚結勸三、初標彼此互讚、此下の文難解前來の經文を見るに、釋迦も諸佛も彌陀を稱讚し給ひしことあれども、釋迦諸佛互に讚歎し給ふ文見へず、然るに如我今者稱讚諸佛とは聞へ難しと云ふに、これを慈恩の疏六十二左の意では、前來六方段の諸佛の證誠は即釋迦が諸佛を讚歎し給ふことになる。何故なれば恒沙の諸佛が此の如く彌陀の念佛往生を證誠なさるゝは汝等衆生に信を生ぜしめん爲めの御苦勞である。實に諸佛方の御骨折下さることゝと

諸佛の證誠を說き給ふ所に、自ら釋尊の諸佛を讃歎することが含てゐる。又此れと同時に諸佛が各々本國に於て此經を說て彌陀の功德を稱讃し給ふ傍ら、其諸佛が釋尊を讃して釋迦は此法を娑婆の衆生に信受令める爲に、種々に善巧を回らし、說法利生を施し給ふことぞと、此界の釋尊を讃歎し給ふ。其事は經の文面に顯著でなけれども、文意に自ら含て居る故、先の經文に汝等皆當に我語及諸佛所說を信受すべしとある。依て略記(三十八)の此下の釋に此有傍正と云ふて、正とは六方段に於て正しく彌陀を讃じ、傍ら諸佛を讃ず、又諸佛も自國に於て正しくは彌陀を讃じ、傍に釋迦を讃ず、釋迦と諸佛が互に讃歎のし合ひになる。そこを此文に如我と云ひ、下に亦稱と亦の字を置て、我釋迦が諸佛の不可思議功德を讃ずる如く、諸佛亦我を稱讃し給ふと互讃を顯してあり。若然らば不可思議功德の文字は、前來彌陀の事であるに、今諸佛不可思議功德とは云何と云ふに、是は所讃の彌陀の佛德のことを能讃の諸佛に附けて云ふたものである。諸佛も釋迦も彌陀の功德を稱讃するのが、即諸佛の德になりて、所謂六合釋の全取他名の有財釋と見るが先輩の說なり。此說良し、故に唐譯の經には如我今者稱揚讃歎無量壽佛極樂世界不可思議佛土功德と彌陀の功德になりてある應知。

○而作是言等、二擧諸佛讃言、此言と云ふが諸佛の釋迦を讃じ給ふ言、即下に出してあるなり。是を通讃下(五)に而作是言結集家叙也と云ふてあるは非なり。一寸見ると結集者の語のやうに聞ゆれども、如我今者と釋尊自ら我と指す、此所は諸佛が釋尊を讃歎し給ふ語を釋尊が傳言なさるゝ所故、自身のことでも釋迦牟尼佛と稱する故に、經家の語と見るは不宜。釋迦は能仁、牟尼は寂默と翻することは華嚴音義一(十四)に出づ。慈恩元照等の疏皆是に同じ。甚難希有之事とは元照疏に釋して他不能爲故甚難、擧世未見故希有とある。此を又聞持記に再釋して於惡世中得道證聖又能開示衆生往生法門可爲甚難可爲希有と、此は下の經に能於娑婆國土(二)乃至說是一切世間難信之法とある。此を二として一に五濁に出現して聖果を證することの難、二には難信の法を疑惑の深き衆生に說き聞かしむる難、此の二を總じて甚難希有と云ふ。五濁のことは慈恩疏(許)已下委く釋す。可披見。娑婆は同疏に二義を以て釋す、娑婆世界者今翻難惡、白寶三昧經云名忍世界等と云へり。忍と云ふに就ても又二義あり。一に此界の主梵王が能く他の勝事を忍んで、妬忌を生ぜざるが故に、主の梵天に從へて名を立て忍界となすと。二に此界衆生忍受三毒及諸煩惱是名忍土と云へり。五濁の濁とは、濁濁の義にして水の濁りかすのこと、清淨

の水でも久しく置くと濁りて滓すを生ずる如く、世が末になると次第に濁り滓すを生じ穢となるを濁と云ふ。故に倶舎論十二(八丁)劫減將末壽等鄙下如滓穢故說名爲濁と其濁の相を開て五とするゆへに五濁と名く五濁の事は常に出ることなれば略之、具には倶舎世間品十二(八丁)論伽論四十四(十七丁)近くは華嚴孔目章二(九丁)別章あり可見。阿耨多羅菩提は先に釋する如し。即釋尊が佛果を成就して娑婆五濁の惡世に出現し、難化の衆生を度することは實に甚難希有のことなりと、諸佛が釋迦佛を讃じ給ふ語なり。其釋迦佛は人壽百歳の時に出世す。悲華經に依れば、人壽二萬歳の時より、五濁の名を得るとある。和讃に劫濁ノ時ウツルニハ、有情ヨウヤク身小ナリ、二萬歳ニイタリテハ、五濁惡世ノ名ヲ得タリ、とは是を云ふなり。已に五濁惡世に出現して、化を施すすら難事であるに、まして況や一切世間難信之法たる彌陀本願の法を說て、衆生に信受せしむるのは難事にして、難中之難無過此難と大經にも說き、今此にも難信之法と云ひ、下に是爲甚難と說けり。問云彌陀他力の法門は易行易修なり。何故に甚難と云ふや。答所說所信の法體は、易行易修の名號なれども、之を信受する機が此甚妙の法を容易に信ぜざる故、甚難となる。其故は聖道の華天一乘の速疾圓頓の法は三乘大乘の漸々修學の法に比すれば、難信難入なれども

此本願一乘に比すれば、難信に非ず、何故なれば其實際に至れば皆是斷惑證理の法門なるゆへ、敢て難信に非ず。然るに本願一乘の妙法は一毫未斷の凡夫が刹那に成佛する法門ゆへ、とても他力廻向の信心の智慧にあらざれば、疑ひ晴るゝこと不能故に、釋迦も諸佛も總がゝりで此を稱讃し、護念證誠して五濁の惡邪無信の衆生に勸信し給へり。今それを此に一切世間難信之法と云ふ。愚禿鈔上(四丁)一難疑情二易信心とあり、又樂邦文類四(二十八丁)淨土非難易難易在人難者疑情咫尺萬里易者信心萬里咫尺とあり。世間とは衆生世間のことなり。○舍利弗當知我於等、三示本懷結勸、此一段は正宗分の終で釋尊自ら出世の本懷たる事を說て結止する卽結勸の文なり、依て大切肝要なる所故に舍利弗を更に呼びかけて當に知るべしとの給ふ。我於五濁等とは近く云へば上の諸佛が讃する所の釋迦牟尼佛能爲甚難希有事と云文を受けて、其言の如く我此五濁に出現して難信の法を說くと自ら前の二難を說て結する文なり。又此を元照疏に釋して承前二難則彰諸佛所讃不虛意使衆生聞而信受とあり。遠く云ふ時は正宗分の初めより極樂依正の莊嚴を初め衆生往生の因果、六方諸佛の證誠護念のことを說てありしが今それを此に總結して勸信する文なり。然るに吾祖唯信文意(二十二)に、小經ニハ極難法トミヘタリ(中略)釋迦牟尼如

來五濁惡世ニイデ、コノ難信ノ法ヲ行ジテ無上涅槃ニイタレリトトキタマフ」とありて此難事と云ふが即難信之法のことと釋してある。此時は般舟三昧經の三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺と說てある通り、今釋迦佛も此難信の法たる念佛を行じて阿耨菩提に到る事を得ると云ふ經文となる。そうすると此文が出世本懷を顯す文となりて我自ら此五濁の世に於て此彌陀の念佛三昧に依りて成佛したから、亦五濁の衆生にも此難信の法たる彌陀の念佛を說て成佛の道は此の名號難信の法より外なし。故に一切世間の爲に之を說て聞かしむ衆生宜しく此法を信ずべしと結勸し給ふ經文なり。此は文面には顯了に見へねども文意に含て在る故吾祖は此の如く釋し給へり○爲一切世間とは、此世間は衆生世間にして一切衆生の事、法事讚には此下の讚文に如來出現五濁隨宜方便化群萌等と佛一代化儀の相を明し、今まで所化の機に應じて種々に法を說て衆生を化益したなれ共今正しく出世本懷を顯して一切世間の爲に此難信の名號法を說く、これで一代化儀を收めて吾能事終ると云ふ意を顯して、種々の法門皆解脫すれども念佛して西方に往くに過ぎたるは無し。乃至衆等廻心して皆往生を願ぜよと結勸してあり。此善導の指南より見る時は此文に我於五濁惡世此難事を行じてと、一經所說の法門をおさへて爲一切世間說此難信之法是爲甚難とある經の文意に多大の意味を含て總結の所に益々衆生に信心念佛を勸め給ふ意が充分ある、實に甚深なりと云べし。五濁の事先に略すと云ひしがやはり心得置く必要あるゆへ此所に附記す。五濁の中、一に劫濁とは劫は、具に劫簸と云ふ此所に時分と翻す、即末代になれば時勢が次第に惡化し隨て飢饉や兵亂疾病等が愈々多くなる、これが即劫濁なり。然るに佛法には時に別體無き故に他の四濁に依りて時の惡くなるのを劫濁と云ふ。二に見濁の見は推度の義で、自己の分別料見のことなり、世が末になるにしたがつて、此の見解即邪分別が强盛となりて正見を亂し正法を破壞す、此を見濁と名く、此を開けば身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見の五見となり。之を名けて五利使の煩惱と云ふ。三に煩惱濁とは、貪、瞋、痴、慢、疑の五鈍使の煩惱が本となりて開けば八萬四千の煩惱となる。四に衆生濁とは末代になる程、人物が惡化して上を敬まひ下を慈しむこともなくなり、自分勝手のことのみをするやうになる、此を衆生濁と名く。此相を孔目章二九に、不識尊卑不敬上接下者名衆生濁とあり、凡て人間は敬上慈下が他の畜類と異り、勝れて居る點であるのに、それが次第に薄らゐて來る所を衆生濁と名く現代の狀態が即是なり。此濁も別體はなひ、我見我慢に依りて此の濁を立てたも

のなり。五に命濁は人間の壽命が百年に一つづゝ減じ漸次して中夭横死の者も次第に增加するはこれ命濁のしるしなり。此事近くはば倶舍論十二品世間品に出づ披き見るべし。○佛說此經已、大門第三流通分三、初叙說經已已下は流通分なり。流通とは聞持記に金光明疏を引て流者下澍通者不壅とありて、正宗所說の法水を末代までに澍ぎて、長く壅からぬやうに傳ふるが流通分と云ふ意なり。依て他經には、經の終に佛の勸持附屬の言がある。即一經の對告衆に對して佛が此法を受持して、遐代に傳へよと云ふ說相となり。然るに此經はたゞ結集者の言ばかりで、佛の敎勅の語なし此は云何と云ふに、これが今經の他經に異る所で、此經は一代經の結經無問自說なれば、序分にも別に發起序なし、今流通分に於ても別に佛の敎勅の語なく一部全體が流通なり。故に法事讃に世尊說法時將了慇懃附屬彌陀名とありて、玄談で辨ずる如く、文の當相より云へば此經の終りのやうに見ゆれども、文の意底を伺へば、一代の結經佛鶴林涅槃に臨みて彌陀の名號を舍利弗に附屬し、度々舍利弗を呼懸け給ふこと實に三十六遍、而も此れ他事に非ず、一經所說の要義たゞ彌陀の名號より外なき故之を身子に附屬す、是を善導は慇懃附屬彌陀名と云へり。彼法事讃の釋は、正しく此下の文なれども附屬彌陀名とは一經全體を指す意なり、其義を覺師口傳鈔下に相承し給へること、已に玄談に辨ずる如し。さて佛說此經已とは、結集者の語にして上の是爲甚難までに佛の說法の終りを告げたことを述べて、此所に佛此經を說き終り給ふと結集者が此語を置けり、故に是は經家の語なり。これが即結前生後の語となる、上の說法の已ることを述べて、下の歡喜信受を引き起す句なり。○舍利弗及諸比丘等、二擧聞法衆、此は此經を聽きたる一會の大衆を擧げたものなり。其中舍利弗は正しく對告衆、及諸比丘とは列衆段に、大比丘衆千二百五十人とありし其比丘衆なり。上の序分には菩薩を列したれども、此所に之を略する所以は、彼所は證信序なる故、聲聞菩薩を具に列ね、舍利弗等の比丘衆ばかりでなく、文殊彌勒の大菩薩や、釋提桓因等の天部衆までが同聞衆となりて此經の會座が開けて、實に堂々たる御說法の有樣なれば、末代の有情は此經の所說に信を置くべしと、具に列ねて證信の序と爲す。今此所は流通分ゆへに、一會の大衆が此經所說の彌陀の名號不思議を聞て信受することを明して、五乘の機類の中で凡夫人天等の正所被の機を出せり。愚禿鈔上に五乘を列ね之に傍正を立てゝ、聲緣菩の三は淨土の傍機なり、天と人とは淨土の正機とせり。今此流通は此經所說の法門を信受する所なるゆへ傍機は略して擧げ、淨土の正機を具に擧げて、

一切世間天人阿修羅等と云へり。一切世間とは上に云ふ如く、衆生世間を云ふ、其數一に非る故に一切と云ふ。天人は云ふに及ばず、梵天帝釋等の諸天なり。人は國王大臣等を初として、凡ての民衆なり。阿修羅は舊譯の梵語新譯にては阿素洛と稱す。此所に非天と譯す。果報境界は勝れて天に似てあれども、天の實行なき故非天と稱す。其性質諂僞にして天よりも劣る故此名を得る。具には探玄記二(三十五右)に佛地論を引て釋せり。又瑜伽論四(十四)にも出づ。等の中に迦留羅(此云妙翅鳥)緊那羅(此云歌神)摩睺羅伽(此云大腹)鳩槃茶(此云甕魅鬼)此等は皆四天王の所領眷屬なり。此等のことは探玄記二(三十)已下并に法華玄讃二(十四)已下披き見るべし。○聞佛所說歡喜等、三結聞信去、佛の所說を聞くとは上に擧げたる大衆悉く一經所說を聞て、歡喜信受と喜んで敬信し作禮と五體投地し、慇懃に禮儀を作爲し、佛の御前を退去することを叙べた文なり。さて歡喜とは慈恩疏(六十六右)に心歡、體悅、故言歡喜と云ふて、其次に伽耶山頂經を引て、三清淨を具するを名けて歡喜と爲すとあり、其三とは一に能說者清淨、二所說法清淨、三受者清淨なり。此三義は一は能說の佛を云ふ、卽佛微妙清淨の身を現じ、四辨八音を以て法を演說し給ふ。二に所說の法を云へば不可思議功德の彌陀名號なり。三に受者清淨とは卽聞き手の舍利弗を初として、文殊彌勒の大菩薩も天人阿修羅等の八部衆までが悉く受法誠信して、少しも輕謗の念を生ぜざる所を清淨と名けて、初て眞の歡喜となる。今此經の終りの歡喜信受は、たゞ一往の歡喜に非ず、此三義を具すと慈恩が釋せられたは洵に服膺すべき釋なり。又顏舒曰歡神悅曰喜と釋して、歡喜の二字を身と心とに分つて、喜相の顏色に表はるゝを歡と云ひ、心の內に悅ぶを喜と云ふなり。吾祖一多證文(左十)に信心歡喜を釋して、歡はみをよろこばしむるなり。喜はこゝろをよろこばしむるなり』と仰せらるゝは、此慈恩の後釋に符合す。次に信受とは慈恩の釋に聞之不謗稱信、領之在心爲受とありて、信受は疑はず謗らず、所說の法を敬信して心の中に之を領納し、愈々之に間違ひないと決定する相なり。信受は疑ひ晴れて深く信ずることなり。先に辨ずる如く此經には流通分と云ふても佛の勸持附屬の語はなく、たゞ結集者の言のみで、流通分にふさわしからずと云ふ疑の存する所なれど、已に一會の大衆が歡喜信受して佛を禮し退去する相を說くのが卽此經の流通分である。是を元祖彌陀經釋の終りに聞佛所說歡喜信受は是奉行之相也。奉行の人とは上に所說の念佛往生の法門を聞て奉行するの人なり。其中に聲聞あり。菩薩あり雜類衆あり。(中略)智慧深利なる者は舍利弗に相從ひ、神通大力なる者は目蓮に

相從ふ。其餘の尊者各々掌る所あり。迦葉阿難の傳持遠く像末に迨ぶ、羅云賓頭盧等の守護八萬歳に至る。況や復文珠は是三世諸佛の智母、十方佛土の中の說法の上首なり。彌勒は是諸佛の長子當來の導師なり。乃至常精進は一切衆生不請之友なり。何の時何の處にか其れ弘通せざらんや、又其他の天龍八部は福力自在にして、世間を領する者なれば、常に能く此教法の流通を守護するなり』と具に釋あり。要するに聽衆が皆歡喜信受して去つたとあるからは、何れの時何れの所に於ても彼衆が此經の弘通を計り、又天龍八部も福力自在にして、常に此經の弘布する所を守護し給ふと云ふことを、委く元祖は述べ給ひ、又横川の略記にも此經に値ふことを自ら喜びて如「予二千年末適聞此經作今願」當生者豈亦彼力乎と喜んでである。准之思ふに吾人も亦宿因多幸にして、此經に値ひ奉り、講經宣布の榮を擔ふこと實に傳持者の恩德なりと感佩に堪へず。今夏不肖の身を以て此經を講ずるの尊命を拜し、開講已來已に三旬を經過し、今日魔事なく講了に及ぶは偏に佛祖の御冥祐の然らしむる所と難有感謝し奉る所であります。

于時昭和七年五月二十二日　　法雲六十六歳記之

佛說阿彌陀經講義　終

昭和七年七月五日印刷
昭和七年七月十日發行

非賣品

京都市上京區烏丸頭小山上總町
大谷大學內
編輯兼發行者　安居事務所
右代表者　朝倉慶友

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入
廿人講町二十番地
印刷所　西村七兵衛
印刷者　法藏館印刷所

終